



# コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



子どもと一緒に収穫が一番の楽しみ



米・食味分析鑑定コンクール国際大会表彰式(長野県木島平村体育館)



造園会社で学んだ技術が農業に大変役立っている

## 父親から託された「食味」へのこだわり 夢は家族三世代で米作り!!

父親から託された「米作りファイル」を片手に、食味に真正面から向き合った米作りに挑戦する元気な男性を紹介します。

青山直也さん(36歳)日高町山田

### 父親の夢を引き継ぎたい

生まれも育ちも日高町山田。父親の勧めもあり、地元の農業高校に進学しました。理想の職業は農業でしたが、生計を立てることに不安があり、造園会社に就職。兼業で、父親の米作りを手伝いました。

青山さんが32歳の秋、それまで一緒に米作りをしていた父親が、急に体調を崩しました。余命1カ月の宣告の中で、父親は「米作りファイル」の作成に着手。年間スケジュール、肥料の設定、田んぼごとの食味…そこには、父親の経験と熱い思いが詰まっていました。このファイルを書く間際に託された青山さんは、父親の情熱を目の当たりにし、引き継ぎたいと考えました。造園の仕事が減らし、米作りに軸足を置いた生活に変え

ましたが、家族の反対・生活への不安から、専業農家には踏み切れませんでした。

### ファイルと始めた米作り

「父親に任せつきりだったので、何から手を付けたらいいのか分かりませんでした」と振り返る1年目。ファイルのとおり作業しましたが、正しく理解できていたか分からず、収穫したお米が、食べられるのか不安でした。

少し心に余裕ができた2年目。「父親のこだわった食味に挑戦したい」と考え、農業改良普及センターに相談し、地元産の肥料を使用しました。

真剣に米作りをすればするほど募る専業農家への憧れ。34歳の秋、家族を説得し、造園会社を退職。米作りで生きていくことを決意しました。

### 自身の目で確かめたい

専業農家元年となる3年目。「神鍋高原では初となるコウノトリ育む農法に挑戦しました」と胸を張る青山さん。「この農法は、農薬に頼らないため、安全・安心な米作りができますが、春に田んぼがぬかるみ、田起こしが難しくなる」と聞いていました。しかし、

自身で確かめないと納得できず、明渠排水などを工夫した結果、春に機械で田起こしができました」と、研究熱心です。

また、思わぬ出来事がありました。コウノトリが青山さんの田んぼに舞い降りたのです。「幸せを運ぶ鳥が来て、うれしかったです。田んぼの中の微生物や生きものの多さに驚きました。食味が良くなり、父親が目標にしていたコンクールで結果が出ました。コウノトリがお米にも幸せを運んでくれた気分です」と、目を輝かせます。

### 信用してもらえぬ米作り

「経営の安定が課題。『青山ブランド』を立ち上げ、食味にこだわった信用してもらえぬ米作りを続け、ファンを増やしたいです」と、次の挑戦を見据えます。

「神鍋高原は米・野菜の産地として最適地。酸素をたくさん含んだ冷たくてきれいな水、昼夜の温度差、適した土質があります。みんなと協力し、神鍋高原の観光産業と環境にいい農業を結び付け、地域の活性化に貢献したいです」と意気込みを語りました。

※明渠排水…農地などで地上に水路を設けて過剰な水を排水すること

# 但東中学校 (但東)

案内者 垣内晴也くん、  
大石佳奈さん、淀美香子さん

3年(右から)



但東中学校は、在校生118人で、生徒会スローガンに「日本一！心を一つに」を掲げています。

同校に通う前生徒会長の垣内くんは芸術部、前副会長の篠部くんは男子卓球部、前副会長の大石さんと前書記長の淀さんは剣道部に所属していました。



部活動のことを聞くと、垣内くんは「活動を通して、今までの自分にはできなかった表現の仕方や考えができるようになった」、篠部くんは「部員全員が個性豊かなメンバーで楽しかった」、大石さんは「大会の団体戦で上位入賞したときはうれしかった」、淀さんは「毎日練習をすることです。

まくなり、試合で勝ったときはうれしかった」と話します。今回は、4人に但東中学校を紹介してもらいました。

特徴ある取組みとして、「あいさつ運動」があります。生徒一人一人が立ち止まって会釈して、あいさつすることを心掛けています。

「ノーチャイム(授業と授業の間のチャイムを鳴らさない取組み)」は、伝統的に続いています。試験時も鳴りませんので、現在では生徒が自分で時計を見て行動するなど、習慣化されています。

「老人クラブ交流会」では、年に1回、自分たちの住む地区に向き、老人クラブの方と一緒にグラウンドゴルフをしたり、伝統芸能を教わったりして交流を深めています。

交流会をきっかけに顔見知りになり、会えば話すようになりました。「交流会を毎年楽しみにしている」と言われるととてもうれしいです。

「プルタブ・ペットボトルキャップ集め」は、地域内の三つのお店に回収箱を設置し、集まったものを関係団体に送り、ワクチンの購入に役立ててもらっています。

10月に開催の「但東ふれあいフェスタ」では、子育て応援団と連携し、ハンバーガーなどを作って、販売しました。立ちっぱなしでしんどかったですが、モノを売る楽しさを体験できました。



また、普段の掃除や遠足では、1〜3年生が合同で班を編成し、活動しているため、学年の壁がなく仲が良いです。後輩たちには、木の温もりのある校舎を大切に、伝統的な取組みを継続して、さらに自慢できる学校、日本一の学校を目指して頑張ってもらいたいです。

## 笑顔の輪

大好きな花の色をいつまでも楽しみたい  
出石押し花クラブ(出石)



▲花や葉の本来の色が生かされた鮮やかな絵画

出石押し花クラブは、花や葉の本来の色の美しさを押し花に残し、その押し花で、絵画を制作しています。平成15年に設立し、14人の会員が、毎月第1木曜日に、出石ふれあいセンター(出石町宵田)で活動しています。

押し花は、分厚い本の間に花などを挟んで乾燥させるとセピア色になりがちですが、このクラブでは、専用のマットに挟んで乾燥させます。この手法だと、花などの本来の色を残すことができます。

この押し花を使うと、一つの絵画の中に四季の花を全て配置して楽しめます。また、「画材」として使い、風景画などを制作することもできます。代表の水嶋富美子さん(出石町嶋)は、「花などをきれいな色で残すことができ、いろいろな絵が楽しめます」と魅力を語ります。

材料は、パンジーやアジサイ、バラ、ネコヤナギなど身近なもので、会員が育てた花や散歩道で見つけた雑草などを使います。指導に当たる山本ふうさん(福田)は「押し花は、色を混ぜられません。立体感や遠近感を出すために、同じ花でも押し花にする季節を変えて黄・緑・茶色などを作ります」と技術を伝えます。水嶋さんは「はがき作りなど、簡単なことから始められます。花好きが集まり、楽しみながら上達していきたいです」と笑顔で話していました。見学・入会希望者は水嶋さんまで。☎52-3769